

【書評リプライ】

横山登志子, 須藤八千代, 大嶋栄子 編
 鶴野隆浩, 中澤香織, 新田雅子, 宮崎理 著
 『ジェンダーからソーシャルワークを問う』
 (ヘウレーカ, 2020年, 四六判, 336頁, 3,000円+税)

横山登志子
 (札幌学院大学)

本書の書評を書いてくださった三島亜紀子先生から「日本のソーシャルワークの大きな一石を投じるものであってほしい」というエールを頂き、まずは感謝を申し上げたい。

書評では本書が世に出る経緯をあらためて紹介してくださっているが、その数年のプロセスこそ编者として貴重な経験となった。かえりみれば、若手ソーシャルワーカーたちとの「ジェンダー学習会」の輪読会、須藤八千代氏が訳されたドミネリの『フェミニストソーシャルワーク』という本、北海道社会福祉学会の合評会に集ったメンバーとの研究会活動、そして船出したばかりの出版社ヘウレーカとの出会いのどれか一つが欠けても成立しなかった。

三島先生が指摘してくださったソーシャルワーク研究にとっての3つの評価点は、①日本のソーシャルワーク／社会福祉学領域にあった空白を埋めたこと、②ジェンダー概念がソーシャルワーク／社会福祉学という学問領域のなかで周縁化されてきたことを指摘した点、③「支援を契機とする社会的協働実践としてのソーシャルワーク」を「素描」した点である。書評リプライでは、この指摘を受けて応答したい。

「日本のソーシャルワーク／社会福祉学領域にあった空白を埋めた」という評者の指摘には恐縮するばかりだが、ジェンダーやフェミニズムの視

点から「空白を埋めたい」という意思是著者らに共通する思いだった。そして、その「空白」はどこかにぽっかりと空いている単独の空間ではなく、現在のあらゆる社会的なしくみや意識と連続・連動している「空白」だと考えている。したがって、あらたにソーシャルワークの領域をつくったり、現在のどこかの領域になにかを追加するというのではなく、ソーシャルワークという構築物をジェンダーやフェミニズムといった視点から「問い直す」「再構築する」という大仕事がまず求められるのではないかと思う。このあたりの指摘は須藤八千代氏、鶴野隆浩氏の論考ですどく指摘されている。また、「空白」は決してひとつではないだろう。本書ではジェンダー概念あるいはフェミニズム理論を主軸にしているが、日本では人種やエスニシティの問題など議論が深まっていないこともあり、宮崎理氏の論考はその点へむけた広がりを感じさせるものとなっている。このように考えると、「空白」は実はすべてソーシャルワークの権力性や抑圧性につながると思う。だからこそ「空白」なのだといえるのではないだろうか。しかし、ソーシャルワークはその「空白」性に気づいてもいる。そして、それを変容する方向へも時代は動き始めていると思う。

「ジェンダー概念がソーシャルワーク／社会福祉学という学問領域のなかで周縁化されてきたこ

とを指摘した」という点については、編著者の須藤八千代氏の論考によるところが大きい。その意味で、杉本貴代栄氏が1990年代にフェミニズムやジェンダーの視点を取り入れてきた一連の成果の延長線上に、本書は位置づくと考えている。また、編著者の大嶋栄子氏は当時の杉本氏の論考を手がかりのひとつとして、さまざまな被害を受けた女性支援の実践を重ねてきており、それらの経験知と理論知を次々と発表している。中澤香織氏の論考も母子家庭の支援そのものの周縁化に問題意識を向けている。「周縁化」を許すということは、「周縁化」された人びとと社会のありようの関連性を、支援者の視野から遠ざけることになる。「周縁化」にゆるぎなく抗うような実践や研究が、確実につながっていくことを願いたい。

「支援を契機とする社会的協働実践としてのソーシャルワーク」を「素描」した点についてもコメントを頂いた。これは近年、筆者がとみに思うことである。たとえば、介護という契機によって生まれる「聞き書き」という継承の実践（六車由美氏）、危機介入を契機とする「支援しない」（支援的ではないというほうが正確かもしれない）対話の実践（オープンダイアログ）、仲間と自由な発想で「研究」する「当事者研究」の実践（浦河べてるの家・向谷地生良氏）は、すべて従来の「専門性」に付与されがちなポジショニングとはまったく異なる。そこでは、単にクライアントのストレングスを評価する、エンパワーするというのではなく、ナラティブ・アプローチの基本理解であるクライアントと支援者の対等性が基盤となっている。それは決して理念的・願望的な対等性ではない。本書では新田雅子氏の過疎地で暮らす一人の女性高齢者のライフヒストリー研究

や、大嶋栄子氏の性被害体験のある女性との関わりのエスノグラフィーが、援助論に矮小化されやすいソーシャルワークをあらためて問い直す濃密な論考となっている。

筆者は現在、DV被害があり心身に不調を抱える母子に関わる機会があるが、彼女らとの関係性は、もちろん「支援関係」の枠組みで出会い「助言やアドバイス」を行うことが多くなる。しかし、その「きゅうくつき」から、あえてその枠組みから離れた関係で出会うことができないかと、小さな模索をしてきた。具体的には仲間と「当事者研究」の手法を用いたサポート・グループをしたり、支援関係ではない場での関係づくりを行ってきた。すると、いかに女性たちが「クライアントとしてふるまってきたのか」が見えてくるのである。そして、その構造のうえに、支援が成立していたかのように見えていたことがわかりはじめてくる。すると、相手の本音や感情や、リアルな現実がよりいっそう見えてくる。と同時に、そんなに簡単に「問題解決」したり「支援」できることではない、むしろ「ともに怒り、ともに悲しみ、ともに考え、ともに研究し、ともに話し合う」ことこそが大事なのだと痛感するようになった。そして、社会の側への発信や行動が求められているのだとも考えた。

支援者としての役割も担いながら、支援者としての限界認識をもち、他方で同じ社会を生きる生活者としてのつながり認識を基点に、対話できる関係性をもつことの重要性、これは筆者のPSWを対象とした過去の研究からも示唆されたことである。「支援を契機とする社会的協働実践としてのソーシャルワーク」についてコメント頂いたことはその意味でもとても嬉しく受け取った。